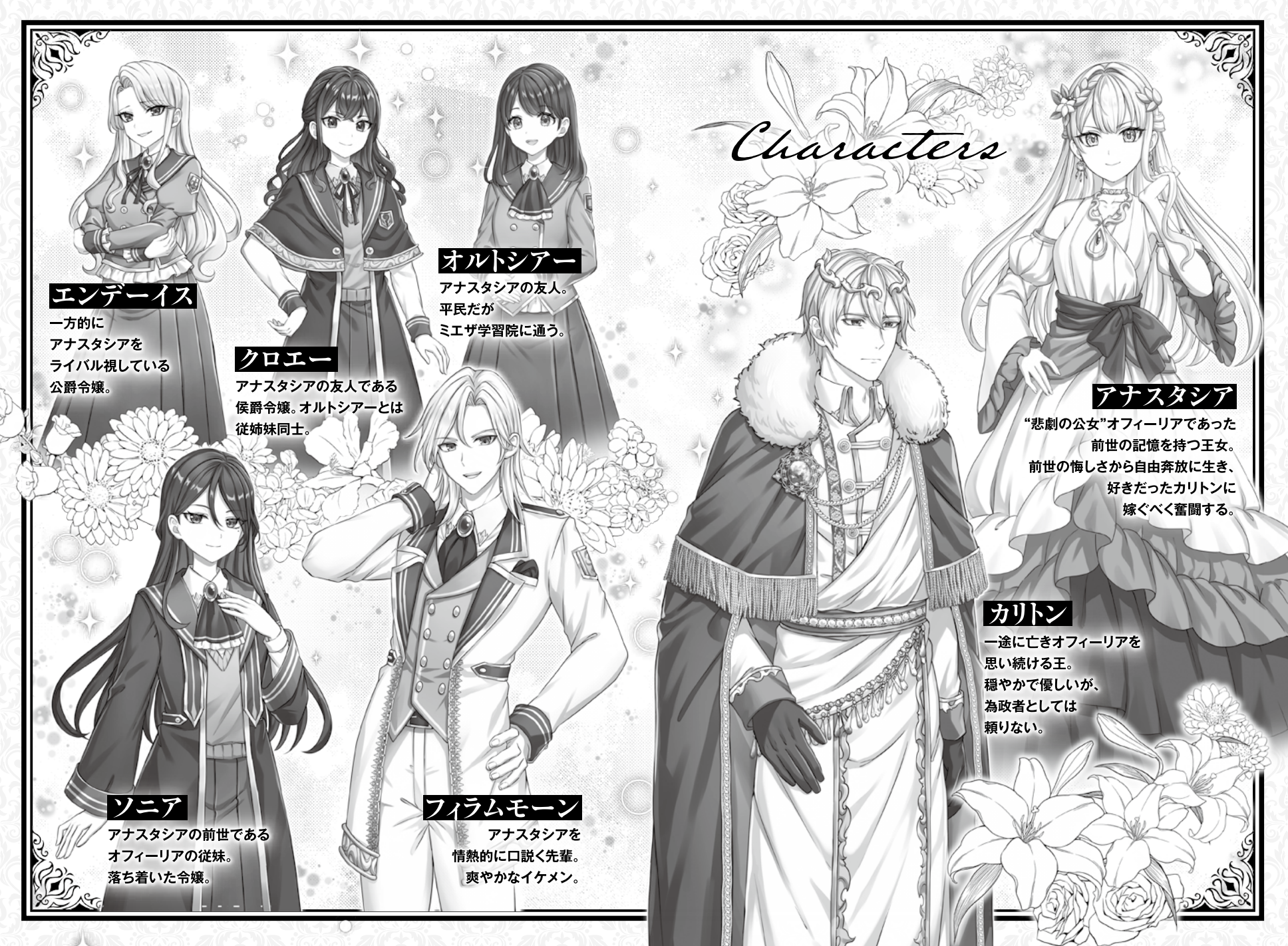
公女が死んだ、その後のこと2

転生公女は王妃を目指す


Characters
エンデーイス
一方的に
アナスタシアを
ライバル視している
公爵令嬢。
クロエー
アナスタシアの友人である
侯爵令嬢。オルトシアーとは
従姉妹同士。
オルトシアー
アナスタシアの友人。
平民だが
ミエザ学習院に通う。
アナスタシア
“悲劇の公女”オフィーリアであった
前世の記憶を持つ王女。
前世の悔しさから自由奔放に生き、
好きだったカリトンに
嫁ぐべく奮闘する。
カリトン
一途に亡きオフィーリアを
思い続ける王。
穏やかで優しいが、
為政者としては
頼りない。
ソニア
アナスタシアの前世である
オフィーリアの従妹。
落ち着いた令嬢。
フィラムモーン
アナスタシアを
情熱的に口説く先輩。
爽やかなイケメン。

【二度目のミエザ学習院】

1．（転生してから）はじめての出会い

連邦首都ラケダイモーンを出発して四日。

アナスタシアと随従（ずいじゅう）の一行を乗せた脚竜車（きゃくりゅうしゃ）は、マケダニア王国の王都サロニカ入りを果たした。

先触れを除けばアナスタシア自身が先行する形でのマケダニア入りだったことで供回りが少なく、数台の脚竜車だけでの王都入りとなった。だが特に大きく騒がれることなく、ミエザ学習院入院式の前日にマケダニア王宮に無事到着した。

なにぶん急な来訪であったので、マケダニア王宮では受け入れ準備ができていなかった。そのためアナスタシアはひとまず客間のひとつに通され、そこで簡単に準備を整えてカリトン王との謁見に臨（のぞ）んだ。

いよいよ、である。いよいよカリトン王との面会が叶うのだ。

そのことにアナスタシアは狂喜乱舞したい気持ちでいっぱいだったが表情にも態度にも一切出さず、案内されるまま謁見の間へ入った。

まあ、案内されずともオフィーリアにとっては勝手知ったる王宮なわけだが、アナスタシアに

とっては初めて足を踏み入れる場所だ。うっかり近道したり、懐かしさのあまりについ庭園に寄り道したりしたいのを、ぐっとこらえて我慢の子である。

「アーギス王家第三王女、アナスタシア姫のご入場でございます」

高らかに告げられたコールとともに大扉が開かれ、アナスタシアは静々と謁見の間に足を踏み入れた。

かつて幾度も公式行事で利用した、そしてあの時に天井付近から一部始終を見ていた謁見の間は、記憶の中のそれとほとんど変わっていなかった。

変わった点を強いて挙げれば絨毯やカーテンなど調度が新しくなっているのと、王の個人旗がバシレイオス王のものでないこと、あとは玉座に座る人物を含めてこの場に集った政務閣僚その他の顔ぶれが異なること、その程度である。

（あれから十八年ですもの。知った顔がなくても当然ですわね）

などと思いつつ、何食わぬ顔でアナスタシアは腰の前で手を重ね、やや頭を下げて敬礼の姿勢を取る。

すぐにでも顔を上げて玉座に座るカリトン王の顔を見上げたかったが、ぐっと我慢。

なお、アナスタシアはカリトンの臣下ではないため、最敬礼に相当する蹲踞礼は取らない。王の声掛けのあとに姿勢を戻して、通常通りの淑女礼をする予定である。

だというのに、いくら待っても王からの声掛けがない。

さすがに本国王家の姫といえども王の許しなしに姿勢を戻せないため、目線を階の最下段に固定するしかなく、玉座の様子が分からない。

「……ああ、済まないアナスタシア姫。どうか姿勢を楽になされよ」

ようやく声が掛かり、アナスタシアは敬礼を解いた。そのままスカートの両脇をつまんで膝を曲げ、優雅に淑女礼をしてみせる。

「お初にお目もじいたします。アーギス王家第三王女、アナスタシア・ル・ギュナイコス・アーギスにございます。ご機嫌麗しゅう、カリトン王陛下」

この時、視線は下げなかった。本来なら玉顔を見てはならない決まりだが、我慢しきれず彼女は王の顔を盗み見る。

（えっ嘘やだカッコいいわ……！）

そこにいたのは三十五歳の壮年王。

十八年前、十七歳の頃は線の細い、儚げで優しい少年の面影を残していた彼は今やすっかり大人の男性になり、身体つきも一回り大きくなったように見える。淡い桃色だった髪はくすんだ暗めの色合いになり、年相応の落ち着きを醸し出していた。

そして何よりもその表情。キリッと引き結ばれた口元に、やや目立つ目尻の小ジワ。眉間に刻まれた深いシワは即位以降の艱難を物語るようで、それでいて眼差しはあの頃と同様に穏やかなままだ。

その穏やかな眼差しが、真っ直ぐに自分を見つめていた。目線が合ったことに気付いて、アナスタシアは慌てて視線を下げる。

（き、聞いてないわ！　カリトンさまがあんなにカッコよくなっているなんて……！）

誰も言ってないのだから知るわけがない。アナスタシアのほうから申し込んだ婚約だから彼から釣書と肖像が送られてきたわけでもないし、実際に見えた時の楽しみにと、彼女は彼の肖像画を一度も取り寄せなかった。

心臓がドキドキして止まらない。

若い頃の儚げな優しい雰囲気が好きだったけれど、艱難辛苦を経て苦労と苦悩を顔に刻んだ今の姿もカッコいい。全然違うベクトルで、どっちもすごくステキ。甲乙つけがたい。

そんなふうに暴れる心臓をなだめるのに必死だった彼女は気付かなかった。目が合った直後のカリトンが、僅かに目を見開いて震えていたことに。

「え、遠路はるばるようこそお越し下さったアナスタシア姫。明日のミエザ学習院入院式の準備もあろうし、今日のところはゆっくり休まれよ。歓迎の宴は日を改めて執り行うゆえ、楽しみに待たれよ」

「は、はい。陛下のご厚情痛み入ります」

視線を合わせられず、俯き加減で礼を述べて、それで短い謁見は終わった。

王は玉座の後ろの専用扉から退出し、アナスタシアは再び開かれた大扉から外に出る。ゆっくり休めとの王の言葉があったためか、居並ぶ廷臣たちは誰も挨拶に来なかった。

その廷臣たちの中にカストリア侯爵アカーテスの顔があったことにも、彼女は気付かなかった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「大変！　大変よ、ディーア！」
「ど、どうなさったのですか姫様⁉」
「大変って、何か問題でもございましたか⁉」
「違うのよエリッサ！　陛下が、カリトン陛下がカッコいいの！」
「「……はい？」」
思わず首を傾げるディーアとエリッサ。
アナスタシア付きの侍女である彼女たちは二十代も半ばに差し掛かっていたが、主への側仕えを優先してまだ婚姻に至っていなかった。それで今回もアナスタシアに付いてマケダニアまで来たわけだ。
彼女たちにしてみれば、自分より十歳以上も歳上の男性にときめくことはない。どちらかといえば父親世代の扱いであり、どれほど見目が麗しくても恋愛対象とは考えない。
それなのに、自分たちより十歳以上も歳下のアナスタシアが、謁見を終えて与えられた客室に戻ってくるなり大興奮で大騒ぎするのだから、首を傾げるのも無理はない。そもそも五歳のあの日以降のアナスタシアは、こんなに大騒ぎすることなどほとんどなくなっていたのだからなおさらである。

ちなみに、伯爵夫人つまり既婚者である侍女イオレイアはアカエイア王宮で王妃オイノエー付きに異動になったので、マケダニアには随従していない。
「なんだか、ご幼少のみぎりの姫様をちょっと思い出しますわ……」
「本当に。わたくしも同じことを考えていたわ」
「それで、姫様。カリトン陛下がどのようにカッコよかったのですか？」
「渋いのよ！」
「「し、渋い……？」」
「そうよ、渋いの！」
うっとりした様子でアナスタシアは語り始める。
「艱難辛苦を乗り越えてきた大人の色気っていうのかしら？　ご即位なさってからここまでの悲喜こもごもが面に出ていらっしゃるというか！　目尻の小ジワなんてさすがにお歳をお召しになったのが窺えるけれど、バシレイオス陛下にもやっぱり少し似ていらして！　――ああ、そうだわ。あの頃のバシレイオス陛下とほぼ変わらないお歳ですものね！　やっぱり親子でいらっしゃるわあ」
「いえ……姫様、バシレイオス前陛下にもお会いしたことはないはずですよね？」
「そんな細かいことどうでもいいのよ！」
「「いえ、どうでもよくありませんが⁉」」
前王バシレイオスが退位したのはアナスタシアが生まれる四年も前のことである。それなのになぜ、前王の容姿を彼女が知っているのか。二十代半ばのディーアとエリッサでさえ、バシレイオス

王の容姿など姿絵でしか知らないのに。
「……あっ。姫様はバシレイオス王の姿絵をご覧になったことがおありなのですね？」
「えっ」
興奮のあまり、自分がバシレイオス王の容姿を知っているはずがないことを忘れていたアナスタシアは、ディーアのその勘違いに乗っかることにした。
「……っあ、そ、そう！　そうなの！」
「やはりそうでしたのね！」
その時、部屋の扉がノックされた。
気付いたエリッサが素早く扉を開けて応対する。彼女は二、三言応答すると扉を閉めて、アナスタシアのもとへ戻ってくる。
「カリトン陛下の御使者が参られました。姫様にお話があるとのことで、内宮の第三応接室でお会いになるそうです」
「そう、分かったわ。すぐに参りますとお伝えして」
「畏まりました」
（今夜はゆっくり休めと仰せだったのに、カリトンさまのお気が変わられたのかしら？）
カリトン王の思惑が読めないのが気にはなるが、おそらく婚約に関するものなのだろう。私的な話になるならば応接室で会うのは納得できる。
さすがにオフィーリアの生まれ変わりだというのはすぐには話せないだろうが、もしかすると気

付いてもらえるかもしれない。
それに、応接室だと謁見の間よりもずいぶん距離が近くなる。これは至近距離でカリトンさまのお姿を堪能するチャンスでは!?
エリッサは使者にアナスタシアの返答を伝え、それからディーアとともに主人の衣装と化粧を手早く整えた。

王宮侍女の案内を頼むと、アナスタシアはふたりの侍女を伴って指定された応接室に向かった。もちろん道案内なしで分かるのだが、不審に思われるのを防ぐためにもわざわざ案内を頼んだのである。
案内の侍女は、名をマイラと言うそうだ。
十代後半の物静かな若い侍女で、礼儀作法をきちんと躾けられているので、おそらくどこかの貴族家の子女であろう。その振る舞いは、マケダニアの王宮侍女には良い印象のなかったアナスタシアの目から見ても好感が持てた。
「アナスタシア姫殿下をお連れいたしました」
マイラが応接室前に立っている近衛騎士に到着を告げた。
騎士は室内に取り次ぐため、一旦室内に消える。彼はすぐに出てきて、アナスタシアに敬礼しつつ告げた。
「カリトン陛下がお待ちです。どうぞお入り下さいませ、アナスタシア姫」

「ありがとう」
開けてもらった扉を潜ると、上質ながらも華美すぎない応接テーブルと、その両サイドに仕立ての良いソファが二脚。正面、窓側の上座にはひとり掛けのソファがあり、そこにカリトン王が座っていた。
その後ろには、年齢こそ重ねているもののオフィーリアもよく知る近衛騎士隊長のイスキュスが立っていて、その隣に侍女のヘスペレイアも控えていた。
見知った顔があるとやはり安心する。そう思って初めて、アナスタシアは自分が緊張していたのだと気付いた。
（わたくしがオフィーリアの生まれ変わりだということに、カリトンさまは気付いてくださるかしら。いえ気付かないのが普通なのだけど。まあ気付いていただけなくとも婚約者として誠心誠意お仕えすることに変わりはないけれど、でも、できれば気付いて欲しいわ）
そう思いつつ、アナスタシアはカリトン王を見た。
そうしておもむろに、淑女礼で挨拶を述べる。
「ご機嫌麗しゅう、陛下。直々にお言葉を賜るとのことで、アナスタシア罷り越しました」
「よく来て下さった。お疲れのところ申し訳ないが、すぐ済むのでお掛けになられよ。茶でも飲んでゆかれると良い」
「はい。お気遣いありがとう存じます」
（ああ……！　これまでの苦労がにじみ出るような低いお声。若い頃とは全く違って、これもまた

素敵だわ！）
勧められるままにカリトンから見て右側のソファに腰を下ろしつつ、心中で狂喜乱舞するアナスタシア。もはやカリトンのことならなんでも褒めそうな勢いである。
その彼女の後ろにサッとディーアとエリッサが並び、ここまで案内をしたマイラは壁際の他の王宮侍女たちの列に加わった。
現在のマケダニア王宮で侍女長を務めるヘスペレイアが素早く茶の準備をして、「失礼いたします」と一言断り自らそれを口に含む。口の中で転がし、飲み下し、無言で待つことしばし。
「毒の混入はございません」
彼女はそう声を上げ、それから自分が飲んだものが入っていたティーポットでカリトンとアナスタシアの器にそれぞれ茶を注いだ。
それを見て、顔色にこそ出さないがアナスタシアは内心で驚愕した。
今の王宮では王に供する茶ですら毒見が必要なのか。しかもそれを、王の侍女を長年務めてきたヘスペレイア自らが担当するとは。
アナスタシアにはこれまで、目の前で毒見をされた経験がなかった。
アナスタシアとしても、前世のオフィーリアとしても、そういうものは自分の前に出てくる以前に済んでいるのが普通だったし、そもそも食材を扱う立場の使用人は信頼の篤い者で固め、毒を盛るような不審人物など取り立てない。
万が一盛られたところで魔術で弾けるのだが、それでも毒を盛られるだけでとんでもない失態で

あり、醜聞になる。
だからこそ前世の母アレサの死因を、誰も毒殺だと考えなかったのだ。
だというのに、カリトン王はどうやらそうではないらしい。しかも最側近であろうヘスペレイアが身を盾にせねばならぬほど、王宮の使用人が信用できないということか。
これは想像していたよりもずっと事態が厳しそうである。一刻も早く反王派を一掃しなければ、カリトン王の治世が安定しないどころか、その身が危険に晒され続けることになる。
東方より直輸入の茶葉で淹れた紅茶を堪能しながら、早くもアナスタシアはそんなことを考えている。
「見苦しいものを見せて済まないね。アナスタシア姫が見知らぬ土地で少しでも安心できるようにと、姫とも面識のあるヘスペレイアに改めて毒見をしてもらったのだが、どうやら怖がらせてしまったようだ」
「あっ、いえ、過分なお心遣いに感謝申し上げます」
（全然違った。普通にわたくしに気を遣ってくださっただけだったわ！）
「それでだ。あまり前置きを長くしすぎるのもどうかと思うし、姫の時間を取らせるのも本意ではないから早速本題に入りたいが。――皆、席を外してくれないか」
カリトン王がそう言って右手を肩口まで上げる。それを合図にイスキュスとヘスペレイア、室内に控えていた他の近衛騎士も侍女たちも、「では御前失礼致します」と頭を下げて出ていく。
「あの、わたくしの侍女たちも……？」

「そうだね、できれば外してもらえると有り難い」
命令でも強制でもなくお願いされると断りづらい。
ディーアとエリッサはやや不安そうにしていたが、アナスタシアが「きっと大丈夫よ」と囁くと一礼して部屋を出ていった。
それでも完全にふたりきりにはできないから扉は少し開かれているし、部屋を出た者たちは皆扉の外に控えている。それに隣室か天井裏かに影の者が控えているはずだ。
「あの、内密のお話ということでよろしいでしょうか」
「そうだね、あまり他人に聞かせるものではないと思うな」
カリトン王の口調が心なしか、若かりし頃の物憂げで優しげなそれに戻っている。そのことに若干ときめきを覚えながらも、一言一句聞き逃すまいとアナスタシアは気合を入れる。
――だが。
「あまり大きな声では言えないが。――婚約者として来てもらっておいて済まないが、私は貴女を愛するつもりはないんだ」
そんな彼女の気合に微塵も気付かず、優しげな声音のまま、カリトンはとんでもない暴言を吐いたのだった。
「……はい？」
「いや、その……あまり何度も言いたくはないのだが」
「いえ、なんと仰ったのかは聞き取れております。わたくしが問い返したいのは意味でござい

ます」
眉間にシワが寄り、つい睨んでいるようになるのは勘弁してほしい。
前世から培った淑女の微笑を保てないほどにショックな一言だったのだから。顔をしかめていないと涙を零してしまいそうだ。
「どうか怒らないで欲しい。貴女が我が国を思いやって、国政の安定のために自ら輿入れを望んで下さっているのも、それが身に余る栄誉であることも分かっているんだ」
「でしたら、どうしてそのようなことを仰るのですか！」
「気持ちだけ有り難く受け取らせてもらう、ということだよ。さすがにあなたが進学先をミエザ学習院にするとは思わなかったが、卒院するまでの三年間でより相応しい婚姻相手を探してもらえるようアーギス王家とも話は付いているし、貴女の婚約が整えば私はより相応しい直系を選んで、王位を降りるつもりでいるんだ」
「陛下が！　陛下こそが正当なる直系王族ではございませんか！」
「私には能力が足りない。十七年も王位にあってなお、国をまとめきれないのだから」
「だからこそ！　わたくしが王妃として！」
「……そのお気持ちは本当に有り難く思う。だけどね、貴女がその才を無為に浪費することはないんだよ」
カリトンの声はどこまでも優しかった。
それがアナスタシアには無性に腹立たしかった。泣きたかった。

だってこれほどまでに国のことを想い、他者を思いやれる王に能力が足りないなどと、そんなことがあるはずがないではないか。
そもそも王位に就いてからも足りない能力を補うべく寝食を惜しんで学びに費やし、真摯に国政に向き合ってきたからこそ、彼は一定の支持を得られてここまで玉座を守ってこられたのだ。
もし本当に、自分で言うように彼の能力が足りないのなら、どこかのタイミングでとうに引きずり降ろされているはずなのだ。
能力が足りないのをきちんと自覚し、身を律して誠実に国政と向き合ってきたからこそ、今でも彼が王位に在るのだ。
それでもなお国政が安定しないのは、頑なに彼を認め受け入れようとしない抵抗勢力のせいであって、彼に非があるわけではない。
だけどカリトンの顔を見ると、アナスタシアはもう何も言えなかった。彼がすでに覚悟を決めてしまっていると、ハッキリ分かったから。
「姫様、陛下はなんと仰られたのですか？」
応接室を出て、再び侍女マイラの案内でアナスタシアたちは与えられた客間に戻った。戻ってからもなお無言無表情のアナスタシアに、恐る恐るディーアが訊ねる。
「……言いたくないわ」
だがようやく言葉を発したアナスタシアは、それだけ言うとまた黙った。

どうしたものかと、ディーアとエリッサは顔を見合わせるばかり。
「ではお食事を」
「いらないわ。食べたくないの」
「で、では、今日はもうお休みになりますか？」
「そっ、そうですわね！　明日はいよいよ入院式ですし！」
「……そうね、準備してちょうだい」
これは下手につつかないほうがいいと、ふたりはアナスタシアを寝かせることにした。そうして湯浴みの準備をし入浴の介助をし、夜着に着替えさせて、彼女の寝室を退去した。
こうして、アナスタシアのマケダニア王宮初日は最悪な終わりを迎えたのである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「……眠れなかったわ……」
アナスタシアはベッドに上体を起こして、窓を覆うカーテンの隙間から射し込む朝陽に目を細めた。
どんな最悪の気分でも朝は来る。
カリトン王から告げられた言葉があまりにショックでほとんど眠れなかったが、それでも起きねばならない。今日はミエザ学習院の入院式である。

「姫様、おはようございます」
「入ってちょうだい」
寝室の扉がノックされ、ディーアの声がする。アナスタシアが入室を許可し、ディーアとエリッサが寝室に入ってきた。
ふたりは顔洗い用の水を張ったボウルとテリー織りの拭き布を載せたワゴンを押してきて、まずはアナスタシアの洗顔と着替えを補助する。それが終わるとすぐにエリッサが退出し、今度は朝食を載せたワゴンを押して戻ってきた。
さすがに朝食すら食べないのでは心配させるため、アナスタシアは黙って用意されたものを口に運ぶ。味などひとつも感じないが、無理やり咀嚼し呑み下す。
その様子を心配そうにディーアとエリッサが見ていたが、何も言ってこないのをいいことにアナスタシアも何も語らない。そんなふうなので、彼女の朝としては過去に例を見ないほど静かなものになった。
入院式は昼からだが、淑女の朝は何かと忙しい。
公式の場に出るためには装いが大事で、身分に相応しいドレスを身に纏うだけでも結構な時間がかかるものだ。どのドレスを着てアクセサリーをどう合わせるか、それを選ぶことから始めねばならない。
「姫様、本日お召しになるエンディマはいかがなさいますか？」
「アクセスアルも選びませんと」

「ふたりに任せるわ」
「「……」」
だが一事が万事こんな調子で、アナスタシアはずっと不機嫌、というか無表情で口数が少なく、侍女たちは何も聞けなかった。幼少期から仕えている彼女たちにとってもさすがに初めてのことであり、戦々恐々としつつも、昼からの入院式に備えて完璧に準備を整えた。
そうしてアナスタシアは、ミエザ学習院のフェル暦六七八年度入院式に臨んだのである。

2．二度目のミエザ学習院

およそ十八年ぶりに目にしたミエザ学習院は、多少は年季が入っていたものの外観に大きな変化はなく、アナスタシアは懐かしさを覚えた。
前世ではあまり良い思い出がなかった学び舎だが、カリトン王も住まう王宮から通うことを考えると……
「ダメね、ひとまず考えないようにしなければ」
どうしても昨夜の王との話が頭から離れない。
あんなことを言われたからとて悲観したり諦めたりといった気持ちは微塵もないが、それでも〝愛さない宣言〟は予想外だったし、それだけにショックも深い。

さすがのアナスタシアも立ち直るのに数日を要するかもしれない。
だがそれはそれとして、連邦内留学生としても本国王女としてもアナスタシアは毅然としなければならない。
入院生代表挨拶こそ任されないものの彼女は今年度の首席入院生の扱いであるため、あらゆる意味で注目の的になるのは避けられない。
そういう意味でもショックを引きずるわけにはいかなかった。
「姫様、大丈夫でございますか」
「心配ないわ、ディーア」
入院式に付き添ってきている侍女ディーアが気遣わしげに声を掛けるが、まだスンとして無表情のままのアナスタシアである。
「新入生諸君、入院おめでとう。栄えある我がミエザ学習院の新たな仲間として、在院生を代表して諸君らを歓迎しよう」
新入生が一同に集められた大講堂でまず壇上へ上がり入院式の祝辞を述べるのは、アポロニア公子フィラムモーンである。
白銀に輝くサラサラの長めの髪と翡翠の瞳が麗しい、線が細くて柔和な貴公子であった。三回生の十五歳で、新年度から学生会長を務める予定だそうだ。
彼は見るからに武闘派ではなく、詩人や音楽家を思わせる雰囲気で、前世の婚約者をよく覚えている身としては逆に新鮮に感じてしまう。

（アポロニア公子ということは、あの当時アポロニア侯爵でいらしたクリューセースさまのご子息ね）

オフィーリアの中では、アポロニア侯爵と言えばクリューセースだ。最期の記憶では、彼は当時爵位を継いだばかりでオフィーリアより五歳上の二十歳、すでに婚姻して長女も生まれていたはずである。

今、壇上で挨拶しているフィラムモーンは、その長女の四歳下の弟という計算になる。

フィラムモーンの在院生祝辞が終わると、次は入院生の答辞だ。壇上に上がって一礼する令嬢を見やり、アナスタシアは軽く眉をひそめた。

（サモトラケー公爵家令嬢エンデーイス様……。そう、あの方が入試首席だったのね）

壇上で堂々と答辞を述べている令嬢、それこそがサモトラケー公爵バシレイオスのひとり娘、エンデーイスであった。

前王バシレイオスは玉座を追われたあと、同じく王妃の座を追われたエカテリーニとともに北部イラクリアにあるマケダニア王室の避暑宮に幽閉処分となった。その後は夫婦であるにもかかわらず両者は厳重に隔離され、顔を合わすことさえない生活を送っていたはずだった。

それがどうしたことか、幽閉先の使用人を買収してエカテリーニがバシレイオスのもとを訪れ、密かに夫婦生活を再開して子を生したと発覚したのが、幽閉から三年目のことである。

バシレイオスは退位させられたとはいえヘーラクレイオス家の直系王族であり、断種措置まで取られていなかったことが災いした。

幽閉生活のままヘレーネス十二王家の血を継ぐ新たな子を産ませるわけにもいかず、バシレイオスとエカテリーニには東のトゥラケリア王国との国境にある孤島、サモトラケー島が領地として与えられ、形ばかりはサモトラケー公爵となった。島外に出ることは許されず、実質的に幽閉先が変わっただけである。

そのサモトラケー島で、エンデーイスは生まれた。バシレイオスとエカテリーニの娘、つまりあのボアネルジェスの実妹である。

だが三十代後半の高齢出産となったエカテリーニは産褥に耐えられず、また生まれたのが息子ではなく娘だったことで気を病んで、呪詛の言葉を吐きながら世を去ったという。

本来ならばそうして生まれたエンデーイスもサモトラケー島から出られないはずだった。しかし、彼女はミエザ学習院への入院資格を主張して、議会がそれを承認してしまったのだ。

そんな彼女が入院生答辞を述べているということは、彼女が入試首席だったということに他ならない。だが記録上の首席入院生は、賢者の学院に合格を果たして急遽ミエザ学習院への進学を決めたアナスタシアということになっている。

（これは……面倒なことになったわね……）

同期の合格者名簿にエンデーイスの名があることは知っていた。

三年間の学生生活で一度も顔を合わせないということなどあり得ないが、それでもなるべく接触を避けるつもりではいたのに、彼女から首席入院生の座を奪ったとなれば、目の敵にされてもなんの不思議もない。

「最後に、わたくしからひとつ」
壇上のエンデーイスが玲瓏な声を上げた。彼女の答辞を半分聞き流していたアナスタシアは、何事かと壇上に意識を向けた。
「本年度、あろうことか、かの〈賢者の学院〉への進学を辞退してまで我がミエザ学習院へ留学なさった方がおられます」
それまで静聴していた出席者たちが、にわかにざわめいた。声を抑えてはいるものの、皆一様に壇上のエンデーイスが何を言いたいのか分からない様子で、呟いたり周囲と言葉を交わしたりしているようだ。
誰のことを指しているかは知れ渡っていることなので、周囲の視線が集まってくるのが嫌でも分かる。
「姫様……」
「堂々としていなさい」
「はい……」
注目を集める自分の後ろで侍女ディーアがか細く声を漏らすのを、振り返らずにやはり小声でアナスタシアは制した。
(面倒だけれど、前回に比べたらどうということもないわ。何を恥じることもないのだから、わたくしはただ堂々とするだけ)
イリシャ連邦構成国のうち、後から加盟したイリュリア王国を除く友邦四ヶ国にはそれぞれ国立

大学として「学習院」がある。
すなわちアカエイア王国の連邦首都ラケダイモーンにあるムーセイオン学習院、テッサリア王国の王都アーテニに所在するアカデメイア学習院、マケダニア王国の王都サロニカに古くから存立するミエザ学習院、そしてトゥラケリア王国の王都オレスティスにアーテニから移転したリュケイオン学習院は全て姉妹校なのだ。
そのうちいずれかの入試に合格し、入院資格さえ得られれば、どこを進学先にしようとも入院生の自由である。進学希望を伝えられた各校のほうも、よほどのことがなければそれを拒むことはない。
そして西方アルヴァイオン大公国にある大学、〈賢者の学院〉に合格しミエザ学習院入院を希望したアナスタシアには、特例で入院資格が与えられている。つまり彼女は不正や非合法な手段でこの場に臨んでいるわけではないのだ。
「本来ならばこの答辞も、その方のお役目でございました。その大事なお役目を、わたくしなどが奪ってしまったことは誠に遺憾であり、この場をお借りいたしましてお詫びを申し上げる次第でございます。――以上をもちまして、本年度入院生の答辞とさせていただきますわ」
エンデーイスはそう締めくくり、たおやかに一礼して壇を下りていった。
(でも……そうね。今年度の入試問題を解いてみてもいいかもしれないわね)
エンデーイスが何点で首席を取ったのか分からないが、もしもアナスタシアより成績が良ければ事務局に申告して彼女を首席に戻してもらえばいい。アナスタシアのほうが点数が高ければ、それ

こそ堂々とすればいいのだ。
（とはいえ、面倒なことに変わりはないわね……）
入院初日、というか入院式の時点から早速火種を抱えることになるとは、さすがのアナスタシアにも想定外である。彼女は周囲に悟られないよう、小さく小さく嘆息するしかなかった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

入院式典のあと、十日ほどは遠方の学生らの入寮や新入生向けの学内施設の案内など始業準備期間があり、その間アナスタシアはミエザ学習院には登院しなかった。
案内はもちろん不要だし、王宮から通うので寮に入らないからでもある。
その代わり、この期間にラケダイモーンから遅れてやってきた随行の人員やアナスタシアの私物などがマケダニア王宮に続々と到着し、王宮内のアナスタシア専用に充てがわれた私室を整えるのにそれなりに慌ただしかった。
そんなわけで、いよいよ前期授業の初登院日である。
アナスタシアの所属はもちろん一回生の優等教室で、これから男女合わせて六十人ほどいる優等教室の同級生たちとの、三年間の学生生活が始まる。
同じ学年でも入試成績により三階の優等教室、二階の上等教室、一階の一般教室とに分けられる。さらに学生たちはみな未婚未成年の小さな紳士淑女たちであるから、男女で別の教室を使用する。

とはいえ合同授業や移動教室の授業もあるため、完全に隔離されているのではない。
ミエザ学習院の中央棟を囲むように立つ三つの教室棟はそれぞれ各学年の専用であり、学年が異なると交流の機会はそう多くない。それでも中央棟の諸施設は学年問わず使用されるし、各学生が選択した科ごとの交流もあるから、全く接点がないわけでもない。
初めて登院したアナスタシアに、クラスメイトたちが早速挨拶にやってくる。
通常であれば授業日までの準備期間に互いに済ませておくものだが、彼女はそうした時期に顔を出していないので誰も彼女に挨拶できていないのだ。
「ご機嫌麗しゅう、アナスタシア姫。お初にお目にかかりますわ。クリストポリ侯爵家が長女、クロエーと申します」
「よろしくお願いいたします、クロエー様。アーギス家のアナスタシアと申します」
同じ優等教室の学生でアナスタシアが最初に好印象を抱いたのが、クリストポリ侯爵家令嬢のクロエーであった。
緑がかった艶やかな黒髪と漆黒の瞳が美しい、たおやかに微笑む美少女である。
黒髪に黒瞳だと地味な容姿になりがちだが、クロエーは立ち居振る舞いに華がありしっかりした教養を感じられ、そこに好感が持てた。
「クロエー様は魔術科でいらっしゃいますのね」
「ええ。爵位を継ぐ予定の弟のためにも、魔術を研究して領内の開発ができないかと思案しているところですの」

「まあ、それは素晴らしいお考えですわ」
聞けば当代の当主である彼女の父デメトリオスには、クロエーと弟のふたりしか子がないという。それで彼女は他家に嫁ぐのではなく、婿を迎えて分家を立てる予定でいるのだとか。
「実はわたくしの婚約者が三回生に在籍しているのです。機会があれば紹介させていただきたく存じます」
「もちろんです。楽しみにしておりますね」
そしてアナスタシアは彼女のほかにも、得難い友を得ることになった。
「今年度の入院生には従姉妹もおりますのよ。紹介させていただいてもよろしゅうございますか」
「ええ、是非」
「あちらにおりますの。――オルトシアー、こっちへいらっしゃいな」
呼ばれてやってきた少女は、確かにクロエーとよく似ていた。だがこちらは黒髪に茶色の目で、いかにも洗練されていなかった。
指定の制服を着用しているため服装では判別できないが、肌は陽に灼けているのかやや浅黒く、明らかに高位貴族の令嬢ではない。
「まあ見て。平民風情が恐れ多くも姫にお目通り願うなど」
「嫌だわ。身を弁えることもできないのかしら」
呼ばれてやってきた少女に、クラスメイトの貴族子女たちがヒソヒソと、だが聞き取れるようにわざと侮蔑の言葉を突き刺す。

オルトシアーと呼ばれた少女は居心地悪そうに身じろぎした。
「あの、オルトシアーと申します。平民ですので家名はありません」
それでも彼女は、アナスタシアに向かってしっかりとお辞儀した。そんなオルトシアーにクロエーが「何を言われようと堂々となさい。わたくしがついていますからね」と優しく声を掛けている。
「平民で、クリストポリ家のご縁者ということは、もしかして貴女、ヨルゴス様のご息女かしら？」
「……えっ、父をご存知なのですか？」
そう。彼女、オルトシアーは、オフィーリアの婚約者ボアネルジェスの側近であったヨルゴスの娘である。
ボアネルジェスの廃嫡に伴い側近としての責任を問われたヨルゴスは、実家であるクリストポリ家の嫡男であったが除籍され、現在は平民の農場経営者として生計を立てているという。そのことはオフィーリア死後の顛末を詳しく調べたアナスタシアも、もちろん知っていることだ。
貴族子女にのみ門戸を開くこのミエザ学習院に平民であるオルトシアーが入れたのは、かつてオフィーリアがボアネルジェスの名で成立させた『没落貴族子女救済教育法』があるからだ。それを考えると、アナスタシアにも感慨深いものがある。
「わたくしもミエザ学習院へ進学するにあたって、マケダニア王国のことはいろいろ学びましたのよ。――クロエー様の仰る通りですわ。オルトシアー様、貴女もこの栄えあるミエザ学習院に合格できる学力をお持ちなのですから、何も恥じる必要はありません。身分差こそありますけれど、

同じ学び舎の友としてわたくしとも接してくださると嬉しいわ」
「そ、そんな、お友達だなんて……！」
オルトシアーはひたすら恐縮しているが、アナスタシアが友と発言したことで、彼女に対する侮蔑の視線や言葉はピタリとやんだ。クロエーがそっと目礼してきたので、アナスタシアも微笑みを返した。
「……あら。平民風情が何を思い上がっているのかしら？」
ところが、雰囲気をぶち壊すひと声が投げつけられたのはその時である。
振り返ると、そこにいたのはやはりというか、エンデーイスであった。
「全く、栄えあるミエザ学習院も地に落ちたものね。このような平民風情に校内をうろつかれては風紀が乱れますわ」
エンデーイスはオルトシアーへの侮蔑を隠そうともしない。
だがそれだけではないと、アナスタシアにもよく分かる。
彼女はオルトシアーだけでなくその血縁者であるクロエーも、そして彼女たちと仲良くしようとするアナスタシアさえも蔑んでいるのだ。さすがに本国王家の姫を直接的に侮辱するような短慮は起こさないが、アナスタシアの目の前で会話しているオルトシアーを公然と侮辱するのはそういうことである。
「ご機嫌よう、はじめましてエンデーイス様」
アナスタシアにそう声を掛けられ、エンデーイスが鼻白んだ。

初対面での挨拶はまず下位の者から上位の者へ。しかるのち、次回以降は上位の者から声掛けして初めて下位の者に発言が許される。
貴族社会のごく初歩的な礼儀であり、アナスタシアが先に挨拶したことでエンデーイスは不敬と謗られることを免れない。そのことに彼女自身も気付いたのだ。
「なっ……！」
「オルトシアー様を悪しざまに貶める前に、貴女にはまずやることがあるでしょう？　そんなことも分からないようなら、サモトラケー公爵家の名もバシレイオス前陛下の名誉も地に落ちますわね」
顔を真っ赤にして押し黙るエンデーイス。
高位貴族の子女たる者、感情を面に出すこともまた恥ずべきことである。たったこれだけのやり取りで、彼女は今後、教育の足らぬ粗忽者として笑い者になるのが確定したも同然だ。
そして一言で彼女の名声を失墜させたアナスタシアは、クロエーとオルトシアーに「ここは空気が悪いわ。あちらへ参りましょう」と囁いてさっさと退散したのである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

「それはまた、ずいぶんと容赦なく斬り捨てたものだね」
アナスタシアの向かいに座る貴公子が、愉快そうにそう言って笑った。

「笑いごとではございませんわ。彼女はわたくしたちだけでなく、〝悲劇の公女〟さえも侮辱したのですから。この程度は意趣返しにもなりません」
表情にこそ出さないが、アナスタシアの声音には不快感が強くにじむ。
エンデーイスのあの発言は、平民のオルトシアーや彼女と交友を持とうとしたアナスタシアへの侮辱だけでは済まなかった。
没落貴族子女限定とはいえ平民にミエザ学習院への門戸を開かしめた、悲劇の公女ことオフィーリアをも侮辱したことになるのだ。
アナスタシアとして生まれ変わったオフィーリアがそれに気付かぬはずがなかった。
だからこその痛烈極まりないあの対応だったのだ。前世までも侮辱されて、黙っていることなどできるはずがなかったのである。
とはいえ、アナスタシアがオフィーリアの記憶を持っていることは誰にも話していないことなので、目の前の貴公子もそこまでは知り得ないし、アナスタシアも話すつもりはない。
「……ところで」
「うん。どうかしたかい、アナスタシア姫」
「なぜわたくしは、ここで貴方とお茶をいただいているのでしょうか、フィラムモーン様」
そう。今アナスタシアとふたりきりでお茶会を開いているのは、三回生で学生会長のフィラムモーンである。
あっという間に広まったエンデーイスとの一件が彼の耳にも入ったらしく、翌日に学習院中央棟のテイオポリオに呼び出されたかと思えばこれである。
話を聞いて笑ってもらえるのは多少なりとも溜飲が下がるが、だからといってテイオポリオの個室を貸し切りにしてふたりきり、というのはいかがなものか。
「……あれ、まだ聞いていないかい？」
「何をですの？」
「僕が貴女の婚約者候補だということだよ」
「……は？」
アナスタシア一生の不覚。
あまりに予想外の一言に、思わず唖然として口を開いてしまった。
「カリトン陛下からもすでにお言葉を頂いていると思うんだけどな。『今後三年間で貴女の新しい婚約を調える』と」
それは確かに聞いた。
そしてあまりのショックに明確に拒否できなかったことも覚えている。
でもそれはアーギス家との話だったはずなのだが。どうしてそこに、アポロニア公爵家の嫡男である彼が絡んでくるのか。
「僕と貴女との婚約が成立すれば、僕はカリトン陛下の養子に入って立太子され、ゆくゆくは王位を継ぐことになる。そうなれば貴女はお望み通り、マケダニアの王妃になれるというわけだね」
「何を仰っておいでかお分かりですの？　貴方はアポロニアの嫡子ではありませんか！」

「そうだけど、僕には姉がいるからね。実家は姉に婿を取ってもらえばそれで済むんだよね」
「そもそも！　貴方にはヘーラクレイオス家の家督を継ぐ資格など！」
「実はあるんだよね。祖父がヘーラクレイオスの王子だったから」
ぐうの音も出ない。
忘れていたが、確かに彼の祖父は婿入りした元王子である。
それゆえフィラムモーンもヘーラクレイオスの直系として、マケダニアの王位継承権が与えられているのだ。
つまり、今彼が発言したことはなんの問題もなく実現可能だということ。
「か、考えさせていただきますわ……」
「うん。時間は三年間あるからね。僕としてはゆっくり仲を深めていければいいかなと思っているよ」
にこやかに微笑う彼の前から、アナスタシアはなす術なく撤退するしかなかった。

3．波乱含みの学生生活

波乱含みの様相で始まったミエザ学習院での学生生活は、意外にも穏やかに進んでいった。
アナスタシアの周囲にはクロエーやオルトシアーをはじめとして比較的好意的な令嬢たちが侍り、

エンデーイスの周囲には彼女の取り巻きの令嬢たちが集まって、優等教室の女子学生は大きく二分された。
エンデーイスはアナスタシアをことさらに無視しているようなので、アナスタシアも自分から絡みに行くことはない。
「あちらはあちらでやっているのですから、わたくしたちも気にしなければいいのです」
「そうですわね。アナスタシア様の仰る通りですわ」
「とはいえ、時々こちらを睨んでいらっしゃるのが気に掛かりますけど……」
「何も言ってこないのだから、気にしないでおきましょう」
波風など立たないのが一番好ましい。

だが、やはりそうもいかなかったようである。
同級生たちとは上手くやれても、上級生となるとまた話は別である。
「貴女がエンデーイス嬢から首席の座を奪ったという外国人ね？」
ある日の昼休み、昼食を摂るためにテイオポリオに向かう途中の廊下で、アナスタシアはひとりの令嬢に行く手を阻まれた。
「……どちらのどなたでしょう？」
分かっていて、敢えてとぼけてみるアナスタシアである。
「まあ！　上級生に対して口のきき方がなっていないわね！」

上級生だと言う女子学生は、だが名乗らなかった。ミエザ学習院では上級生のほうが上位者であると言わんばかりだ。
であれば、アナスタシアも容赦はしない。
「わたくしが誰なのかは、当然ご存知ですわね？」
「それがなんだというのかしら？」
「では連邦王女として命じます。名乗りなさい、無礼者」
スッと表情を消し、真っ直ぐに立って真正面から毅然と彼女を見据えながら、アナスタシアは命じた。
その言葉を聞いた瞬間にクロエーが蹲踞礼を取り、一拍遅れてオルトシアーが慌てて続く。
「なっ……！」
上級生の反応はさらに遅れた。
遅れるどころか、表情を歪めてアナスタシアを睨みつけたではないか。
「まだ分からないようですね。――衛兵、この者を捕らえなさい！」
ミエザ学習院内には学生である貴族子女の安全確保、ならびに無用なトラブルが起こった際に院側が介入する手段として、そこかしこに歩哨が控えている。だからこの時も衛兵たちが何人も集まってきて、上級生の令嬢を取り囲んだ。
ただ彼女が暴れているわけではないため、衛兵たちは儀礼に則り、その身に触れずに礼を尽くしつつアナスタシアから引き離しにかかる。

「ぶ、無礼者！　わたくしをハラストラ公爵家のテルクシノエーと知っての狼藉ですか！」
「勿論、存じております。我らはただ、連邦第三王女殿下の命に従うまでのこと」
「さ、一度教員室まで参られよ」
「なっ！　わたくしより下級生に従うというの⁉」
何を当たり前のことを。連邦構成国の一貴族の子女より連邦王女を下に扱えるわけがない。
アナスタシアもクロエーも、オルトシアーでさえそう思うのに、テルクシノエーと名乗った上級生にとってはそうではないらしい。
退去を促されるテルクシノエーは自分のほうが正しいと信じているようで、衛兵たちになかなか従おうとしない。
一方、衛兵たちも公爵家のご令嬢の身に不用意に触れるのは不敬とされかねないため、なかなか実力行使に踏み切れない。
「待て待て待て！　なんの騒ぎだ！」
そこへ新たな乱入者、今度は男の声がして、体格の良い男子学生が駆けてきた。
「テルクシノエー嬢が何をしたと言うのだ！」
少年は語気荒く衛兵たちの肩を掴んで引き離しにかかる。だが衛兵たちもアナスタシアの命令があるため退こうとしない。
そのまま揉み合いになるかと思われたが、男子学生はその場にアナスタシアたちがいるのに気が付いた。

「おい、そこの下級生！　何が起こったのか説明しろ！」
そして居丈高にアナスタシアに向かって命じたではないか。これにはさすがのアナスタシアもビックリである。
彼女は手に持った扇をサッと広げて口元を隠し、不快感を露わにする。
何も言わないアナスタシアに代わって、すでに蹲踞礼を解いていたクロエーが声を上げた。
「テルクシノエー先輩は連邦王女アナスタシア姫殿下に対して不敬の行いがありました。それで殿下が捕縛をお命じになりましたのよ」
「はぁ!?　連邦王女だ!?　ここがどこか分かっているのか下級生！」
「……はい？」
「ここはマケダニア王国のミエザ学習院だぞ！　連邦王女がいるわけないだろうが！」
アナスタシアもクロエーも、オルトシアーまで唖然呆然。
目の前で怒鳴る男子学生はどうやらテルクシノエーと同じ二回生のようだが、あろうことかアナスタシアの入学を知らない様子である。
「……お前、見ない顔だが、まさかお前がアナスタシア姫殿下の名を騙ったのか!?」
「あっ、あの、先輩！　騙りじゃなくて」
「平民風情が口を開くな！　無礼であろう！」
オルトシアーが誤解を解こうとするも、一喝されて黙り込む。やむなくアナスタシアは扇を閉じて、男子学生を睨みつけた。

「騙りではなく、わたくしが連邦第三王女アナスタシアですわよ。貴方、わたくしの姿絵をご覧になったこともないのかしら？　サロニカ伯爵家の教育はどうなっているのかしらね？」
「なっ、俺がサロニカ伯爵家のテルシーテースだとなぜ知っている!?」
知っていて当然である。アナスタシアは自分の死後の顛末を事細かに調べたのだから。
旧サロニカ公爵家が伯爵位に降格したのも、急遽家督を継ぐハメになった当時の次男が苦心惨憺したのも、その子たちが自分が生まれる以前は実家が公爵家だったことを知ってプライドを拗らせていることも、全部まるっと知っているのだ。
アナスタシアは入院前にミエザ学習院の学生名簿をあらかじめ取り寄せていた。当然、自分と同じ新入生にエンデーイスがいることも、二回生にテルクシノエーやテルシーテースがいることも事前に把握済みなのだ。
「このような場所で、なんの騒ぎですの？」
テルシーテースの大声が響いたのだろう、学年を問わず学生たちが集まってきた。
大半はアナスタシアの姿に気付いて遠巻きにしているが、その中でひとりの令嬢が進み出て話に割り込んできた。
彼女は最初の一言のあと、すぐにアナスタシアに向かってたおやかに淑女礼を行った。
「お初にお目もじいたします、アナスタシア姫殿下。このたびはご入院おめでとうございます。わたくし、カストリア侯爵家が娘ソニアと申します」
「まあ、貴女がカストリア侯女ソニア様ですのね。アーギス家のアナスタシアと申します。以後お

見知りおきくださいませ」
名乗りもせぬ無礼者と立て続けに出くわしたせいで、礼儀に則ったソニアの作法が余計に心を穏やかにしてくれる。
「まっ待てソニア嬢！　ではその下級生が本当にアナスタシア姫だというのか⁉」
どうやらテルシーテースは、まだアナスタシアを騙り者だと決めつけていたらしい。
「まあ、テルシーテース様は姫殿下の姿絵さえもご覧になっておられませんの？」
信じられないといった様子のソニアの声に、彼は不機嫌そうに顔を背けた。それに対して、ソニアが呆れを隠そうともせずに真っ向から非難した。
「ミエザ学習院のみならず、連邦友邦の四つの学習院はいずれも『全ての院生に身分の上下なし』と謳っておりますけれど、それは取るべき礼儀を無視して良いという免罪符ではありません。いみじくも貴族子女であるのならば、せめて最低限の礼儀くらい弁えなさい」
「あっ、貴女こそ礼儀を弁えるべきではなくて⁉　侯爵家の娘の出る幕ではなくてよ！」
まだ衛兵たちと揉めていたテルクシノエーが戦線復帰して、もはや状況は混沌と化す一方である。できれば彼女たちを罪人扱いまではしたくなかったアナスタシアだが、ヘレーネス十二王家に連なるソニアにまで礼を失するとなれば最終的にはそれもやむなしか。
そう考えていたところに、さらなる介入者が現れた。
「これ以上、我が国の恥を晒さないでくれるかな」
この上さらに面倒なことに、とげんなりしかけたアナスタシアの耳に届いたのは、学生会長フィラムモーンの声であった。
（これだけの騒ぎになれば、学生会長がお出ましになっても不思議はないわよね）
そう思いつつアナスタシアは、フィラムモーンの声のしたほうに目を向ける。彼は黒髪のひとりの男子学生を伴ってこちらに向かってきているところだった。
その彼はアナスタシアの前まで進み出ると、サッと拝跪礼を取り頭を下げた。
「連邦第三王女アナスタシア姫殿下にご挨拶申し上げます。ミエザ学習院三回生、学生会長のアポロニア公爵家が一子フィラムモーンと申します」
彼とは先日すでに挨拶を済ませているから、本来は不要なのだが。この場のテルクシノエーやテルシーテースに見せつけるためだと理解しているため、アナスタシアは鷹揚に頷く。
「我が国の不届き者どもの無礼をお詫び致します。どうかこのフィラムモーンに免じて、一度だけお赦し下されば僥倖にございます」
跪いて頭を下げるフィラムモーンの向こうでテルクシノエーが顔を真っ赤にして怒っているが、口を噤めているだけまだマシか。
何しろ、この状況でなお口を開けた勇者がいたのだ。
「なっ、学生会長！　なぜ、下級生に頭を下げるのですか⁉」
「なぜ、ではないだろう。君こそ真っ先に跪くべきじゃないのか？」
学生会長にすら抗議の声を上げたテルシーテースは、フィラムモーンが連れてきた黒髪の男子学生にそう諫められて激昂した。

「貴様っ！　平民風情が――」
「君たちの主張通りなら、上級生のほうが上位者、なのだろう？」
ぐ、と声を詰まらせ怒りで顔を真っ赤にして、それでもさすがの彼もひと言も言い返せなかった。自分の主張が巡り巡って自身を切り裂いただけなので、言い返しようがなかったのである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

結局、テルクシノエーとテルシーテースは衛兵たちに囲まれ教員室に連行された。おそらく院長直々にお叱りを受け、軽ければ反省文提出、重ければ数日間の停学処分になるだろう。
だが退学処分にさせるつもりはアナスタシアにはない。
ハラストラ公爵家とサロニカ伯爵家はともに反王派、下手に刺激すればカリトンの立場がますます危うくなりかねない。アナスタシアはあくまでも、学生間のトラブルとして済ませるつもりである。
そういう意味では、「自分に免じて一度だけ」と赦しを乞うたフィラムモーンの言動はファインプレーであった。あの発言があったからこそ、アナスタシアも情状酌量を与えやすくなったのだから。
「お口添えいただき感謝いたします。下級生だの騙り者だのと謗られて、正直どうしようかと考えていたところでしたの」

「なに、非才の身ですが、名ばかりの肩書でも役に立てて何よりです。今後も何かあれば、遠慮なく頼って下されば私も嬉しい」
ようやく場が収まったことに安堵しつつ、アナスタシアは礼を述べた。フィラムモーンも柔らかく微笑んでそれに応えてくれる。
それをクロエーやソニアが「きゃ」「まあ」などと頬を染めて見ていることに気付いて、顔にも声にも出さずに頭を抱えるアナスタシアである。
アナスタシアとカリトンの婚約はミエザ学習院在籍中の三年間は公表されない、いわば仮婚約である。それを知っているのは他にフィラムモーンだけ、つまりクロエーやソニアはアナスタシアがミエザ学習院に入院した本当の理由を知らないのだ。
だから彼女らには、アナスタシアとフィラムモーンがいい雰囲気に見えたことだろう。
彼女たちにそう見えるということは、他の学生たちにもそう見えるということだ。誤解が誤解を呼びそうな予感がして、ひたすら面倒くさいと感じるアナスタシアであった。
「あっ、そう言えばアナスタシア様」
ようやく再びテイオポリオへの移動を再開したところで、クロエーが思い出したように声を上げた。
彼女やオルトシアーらには「殿下」と呼ばないようすでにお願いしているため、クロエーも上下関係なしの学生間の敬称である「様」をつけてアナスタシアを呼ぶ。なお学生間ではファーストネームで呼び合うことが規則で定められているため、彼女は特に許可を求めることなくアナスタシ

アの名を呼んでいる。
「先日申し上げました、わたくしの婚約者を紹介いたしますわ」
「まあ。どちらのどなた？」
今このタイミングでこの話題ということは、向かう先のテイオポリオで同席する予定なのだろうか。そう思って彼女に顔を向けると、クロエーは一緒に歩いている黒髪の三回生の腕を取った。
「わたくしの婚約者は、従兄のクトニオスなんですのよ」
そうして嬉しそうに微笑んだのであった。
「おっおい、クロエー嬢」
「あら、いつものように呼び捨てにしてくださいませ、お従兄さま」
黒髪の三回生はいきなり紹介されてやや狼狽えたものの、すぐに小さなため息を呑み込んで、自分の腕に触れているクロエーの手を優しく包み込む。そうしてアナスタシアに改めて向き直り頭を下げた。
「自己紹介は先ほど済ませましたが、改めてご挨拶申し上げます。クロエーの婚約者、クトニオスと申します」
「まあ。そうでしたのね」
驚きはしたものの、そうと聞けば納得である。
先ほどの無礼者どもが衛兵たちに連れられて退去したあと、彼は名を名乗るとともにオルトシアーの兄であると告げていた。つまり彼もまたアナスタシアのよく知るヨルゴスの子なのだ。

彼らの婚約は従兄妹だからこそ組まれたものだとよく分かる。穏やかに微笑み合うクトニオスとクロエーの姿は、クリストポリ侯爵家とその家を除籍されたはずのヨルゴスが良好な関係を保っていることの証左であった。
「ふふ。ヨルゴス様もきっとお喜びなのでしょうね」
「父ですか？　いえ、父はクロエーが嫁に来るのは反対でして」
「あら、そうなんですの？」
「クロエーほどの器量があるならもっと良い縁談があるだろう、と。それでこの子に大泣きされましてね」
「だって伯父さまったら酷いのですわ。物心ついた頃から頻繁に遊びに行っていたわたくしがお従兄さまと遊んでいても何も仰らなかったのに、年頃になったら急に手のひらを返すのですもの。乙女の純情を弄ばないでいただきたいわっ」
「それでクロエーに全面降伏したくせに、今でもブツブツ言ってるからなあ」
「いっそのこと伯父さまには、我が家の空いているクレニデス伯爵位を押し付けて差し上げればいいのですわ。そうしたらお従兄さまも伯爵家の世継ぎですもの、伯父さまが反対なさる理由もなくなるわ」
口を尖らせて不満を述べるクロエーと、苦笑しつつもそれを宥めるクトニオスがおかしくて、アナスタシアはつい笑ってしまった。
平民に落ちたあとのヨルゴスに関してはほとんど記録がなくてどうしているのか若干気掛かり

だったのだが、どうやら穏やかで平和に家族と幸せに暮らしているのだと知れて安心できた。
そのうち、オルトシアーやクロエーの友人の立場を利用して遊びに行ってみよう。
オフィーリアとして知っている彼の姿はいつだって悩んでいるか困っているか、申し訳なさそうに目礼してくるかだったから、今ならあの頃に見られなかった彼の笑顔を見られるかもしれない。
「それはそれとして、フィラムモーン様はなぜわたくしたちと歩いておられるのでしょうか？」
ごくごく自然に当たり前のように隣を歩いているフィラムモーンに、アナスタシアは目を向ける。
「うん？　僕らもちょうどテイオポリオに向かうところだったからだけど。せっかくこうして合流したのだし、同席してはダメかな？」
そして彼に柔らかな笑顔を向けられて、思わず息を呑んだ。
（イッ、美丈夫だわ……っ！）
イケメンなのは分かっていたことだし、そもそもアポロニア公爵家は陽神の祭祀を司る司祭の家系で、直系は美男美女が多い。同じヘレーネス十二王家の中でも武骨な印象の強いヘーラクレイオス家や尚武の気風のアーギス家、文人の気質のあるカストリア家などとは雰囲気からして一線を画している家系だ。
それは分かっていたのだが、それでも至近距離でその微笑みを浴びるとクラクラしてしまう。
だって彼女がよく知る男子といえば、オフィーリアだった頃の婚約者であるボアネルジェスだけなのだ。
武骨で粗忽で声も態度も身体つきもやたら大きかった彼しか、彼女は知らない。

そしてアナスタシアとして生まれ変わった今世でも婚約者やその候補がいなかったせいで、彼女はキラキラしいイケメンにまったく慣れていなかった。
何を隠そう、実は彼女はイケメンが大好物である。元々カリトンを好ましく思っていたのも、彼が儚げな雰囲気の弱々しいイケメンだったからなのだ。
（くっ……！　なんて眩しい笑顔なの！）
「……？　どうかしたかい？」
「なっ、なんでもありませんわ！」
「そうか。では早く向かうとしようか」
「なっ……!?」
ものすごく慣れた態度で手を取られ、アナスタシアはまたも驚愕する。これまで男性からのエスコートといえばニケフォロスとヒュアキントスにしかしてもらったことがなく、もうそれだけで心臓が跳ね上がる。ドキドキが抑えられない。
「あらあら。アナスタシア様ったら嬉しそう」
「ちっ、違うから！　わたくしは別に……！」
「とか仰りながらもお手を離そうとなさいませんものね」
「すごい、まさに美男美女のデュオ……！」
「ですから……っ！」
「まあまあ、先を急ぎましょうか。エスコートくらいならいつでもお役に立ちますとも」

「あああお待ちになって……！」
クロエーとオルトシアーの勘違いはますます深まり、フィラムモーンは嬉しそうにアナスタシアの腕を引く。そして彼女はそれに抗えない。
だって本意はともかく、紳士の善意のエスコートを淑女は理由なく断れないから。
それにそもそもの話、トラブルから助けてくれた彼のエスコートを断れるものではなかった。
こうして抵抗することもできずにテイオポリオに連行され、同席して一緒に昼食を摂るハメになり、その間ずっとなす術なくイケメンオーラを浴びせられ続け、翻弄されまくって何もできなかったアナスタシアであった。

立ち読みサンプルはここまで

【陽誕祭】

1．陽誕祭当日

入院式の頃は色鮮やかな花咲き乱れる花季の真っ盛りだったが、季節はまたたく間に移ろい、しとしと雨が降り続き山々が緑を深める雨季が明けるのももう間近。
多少のいざこざやトラブルはありつつも、気の合う友人たちを得て、アナスタシアは初めての学生生活を満喫していた。
だって前回は入院早々に学生会長代理などというものに指名されて、学生生活を楽しむどころではなかったから。
入院式直後に自ら学生会長をやると言い出したボアネルジェス。その彼に忖度したミエザ学習院側と当時の学生会長によって彼が新たに学生会長に指名され、その補佐を否応なしに受け持たされて、そこから一ヶ月もしないうちに正式に代理に指名されたのだ。
当時の、いや歴代の学生会にはそんな役職などなかったというのに、いつの間にか教師陣にまで認めさせていた婚約者の決定に抗うこともできず、オフィーリアは雨季の終わりには上級生の学生会役員たちを率いる立場になっていたのだった。
（本当に上級生のほうが上位者であったなら、あの頃のあれもなかったでしょうにね……）